

佐々部清監督映画作品における「感謝」について

鈴木, 右文
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門 : 助教授 : 英語学

<https://doi.org/10.15017/3420>

出版情報 : 言語文化論究. 22, pp. 49-57, 2007-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

佐々部清監督映画作品における「感謝」について

鈴木 右文

1 まえがき

筆者は外国語教育の担当が本務の身であるが、九州大学全学教育の中にある、総合科目「映画の世界」という授業のオーガナイザーも毎年務めている。これは複数の教員のリレー講義による教養科目であるが、日本映画を中心に取り上げ、ハリウッド作品を典型とする娯楽映画に目が行きがちな若者に邦画の魅力を語りかけて、考えながら作品を鑑賞する体験を持ってもらうことを目的としている。毎年副題を変えて実施しているが、平成18年度前期は「佐々部清論」を副題とし、同監督の知人である福岡歯科大学の荒木正見教授をいつものとおり非常勤講師に迎え、授業では佐々部清監督御本人にもゲストとして御登壇願った(2006年6月14日)。せっかく御本人にもおいでいただいたのに、このままで終わらせるのはもったいないことである。またこの科目は主にレポートにより受講者の成績評価を行っているが、目標とすべき標準的なレベルや内容についての例を示したことがなく、気になっていたところである。そこで、オーガナイザー自ら佐々部作品に関する論考の執筆を試みることにした。本論は、これまでの佐々部清監督作品の流れを、「感謝」という視点から捉える試みである。世間ではあまり受け入れられなかった『四日間の奇蹟』が重要な収斂点となり、それまでの作品のベクトルはそこへ向かっていて、またそこから新たな出発をしている、そのような構図が見られるということ、「感謝」をキーワードにして主張する。受講者のレポートの中で質の高いものの中には、映画評論家による評論を意識し過ぎて、ひねりにひねり、過度に知ったかぶりをしているものも見受けられるのであるが、本稿では、素直に平易に書くことを心がけた。

2 佐々部清のフィルモグラフィ

佐々部清監督は1958年下関に生まれた。明治大学文学部演劇科、横浜放送映画専門学院(現・日本映画学校)を経て、1984年より映画及びテレビドラマの制作に関わった。80年代後半には助監督を務めることも多くなり、さらに90年代に入るとチーフ助監督にも登用された。この段階までの有名な作品としては、『北の国から'95秘密』(1994年、演出補)、『北の国から'98時代』(1998年、演出補)、『ユキエ』(1998年、監督補)、『鉄道員(ぽっぽや)』(1999年、チーフ助監督)、『ホテル』(2001年、チーフ助監督)などがある。

この後2002年の作品『陽はまた昇る』(VHS開発に関わる『プロジェクトX』的作品)で監督デビューを果たし、早速第26回日本アカデミー賞の優秀作品賞・主演男優賞・助演男優賞・音楽賞と第15回日刊スポーツ映画大賞の石原裕次郎賞を受賞した。続いて2003年に『チルソクの夏』(日韓の高校生の恋愛青春物)を公開、第44回日本映画監督協会新人賞を受賞した。さらに2004年に公開した『半落ち』(妻を殺した男の行動の謎解きの形を借りて命を考えさせる)は、第17回日刊スポーツ映画大賞の石原裕次郎賞を再び受け、第28回日本アカデミー大賞の最優秀作品賞・優秀監督賞・

優秀脚本賞・最優秀主演男優賞・優秀助演男優賞・優秀助演女優賞・優秀音楽賞・優秀撮影賞・優秀照明賞・優秀美術賞・優秀録音賞・優秀編集賞に輝いた。『チルソクの夏』『半落ち』の共同では、第22回日本映画復興奨励賞（日本映画復興会議）と第9回新藤兼人賞金賞（日本映画制作者協会）を受けている。この時点でメジャーな映画監督のひとりとして世に受け入れられたことは間違いない。2005年には『四日間の奇蹟』（死期を知った若い女性を描くファンタジー）と『カーテンコール』（監督の故郷下関を舞台にした映画へのオマージュ）を公開し、後者は第15回日本映画批評家大賞の作品賞を受賞した。2006年には『出口のない海』（人間魚雷乗組員の物語）が公開され、現在2007年夏の公開を目指して『夕風の街 桜の国』（テーマは原爆）が制作中である。矢継ぎ早に作品を世に送り出していると言え、多作な監督ということができよう。

3 『四日間の奇蹟』における「感謝」

原作は第1回『このミステリーがすごい!』大賞（宝島社）受賞の同名小説（朝倉拓弥）で、監督自身が、「最近、感謝の言葉を素直に言えない世の中ですよね。ありがとうと素直に言える素晴らしさを表現したかった。」（映画『四日間の奇蹟』公開記念イベント in ザ・モール周南（下松市）での講演、<http://www.navitown.com/event/syunan0612.html> より）と語り、この映画のテーマが「感謝」であることを明らかにしている。

作品で最も大きく取り上げられているのは、主人公格の若い女性である。早くに母親を失い、結婚後子供が出来ないことを理由に離縁させられ、父親も死んで天涯孤独の身となり、救ってくれた医師夫妻の勤める療養所で働くも、家族を持ち得ない悲しみを抱き続けていた。そこへ高校時代の初恋で片思いの相手が偶然現れて心がときめく。彼は身寄りのない知的障害を持つ少女を連れていたが、物盗りに両親を射殺されたところを助け、かわりに指を負傷し、ピアニストになる夢を諦めて、ピアノだけは天才的な少女を連れて全国を演奏に回っているのだった。女性は遊んでいる最中に落雷による落下物から少女をかばい、致命的な傷を負って意識不明となって、この世ならぬ者から自分の命が四日間しか残されていないことを告げられて、その少女の肉体に憑依し（第1の奇蹟）、はじめのうちは身の不運の連続を嘆いて取り乱す。しかしその四日間を通じて、彼との交流に心を癒され、また患者たちが病身の自分を気遣う様子に、自分が既に「家族」を得ていたことに気づいた。そして彼や周囲の人々に感謝の気持ちをきちんと伝え（ほとんどの相手は憑依に気がついていないのだが）、このときだけ指が使えるようになった彼に思い出の曲を弾いてもらい（第2の奇蹟）、光の国へと旅立って行った。

映画が直接描く最後の四日間の出来事は、不遇の我が身を嘆くことから自分の人生に対する気持ちの整理へと、喪失と再生の過程を提示する。その過程の中で、彼女に「感謝」が生まれてくるわけだが、眼前のものを対象とするものとしては、彼女の初恋に応え最後に立ち会ってくれた彼への感謝と、肉体を貸し与えてくれた少女への感謝がある。しかし、人生の最後を迎えるにあたってこみあげてくる感謝とは、それに留まるものではない。療養所に紹介して世話をしてくれた医師夫妻への感謝、家族同様に大切に思ってくれていた患者たちへの感謝に広がり、最後の日には、「両親に生んでくれてありがとうと胸を張って言える」というセリフに見られるように、自分の人生を肯定的に捉える心境に達することができた。これは、自分の人生を走馬燈のように振り返り、命がもたらす人生の素晴らしさ、そしてそれが次の世代へと受け継がれていく素晴らしさに感謝する、究極の姿勢であると言えよう。ここまで来ればいわば命の神秘とでも言うべき理屈で割り切れない宗教的な雰囲気さえ漂うのだが、別れた夫が再婚した女性との間に設けた子供をこの女性が抱いたときの表情は、その命を繋ぐ慈愛に満ちあふれたものであり、聖母マリアの姿を連想させ、凜とした

その姿は、彼女の最後に立ち会うことになった観客にとって、拍手を贈りたくなるほどに崇高である。また、重要な展開が教会の中で進行すること、その教会の入口にイエスを抱いたマリア像が設置されていること、女性の名前がマリアを思わせる「真理子」であること、彼女が子供のできない体であることとマリアの処女性とがだぶって見えることなど、とても偶然とは言えない設定になっている。

『四日間の奇蹟』は、世間では佐々部監督がファンタジーに寄り道したためにできた失敗作と片づける向きもあるようだが、人生・命そのもの、命が受け継がれていくことそのものへの感謝という大きなパースペクティブで描かれた作品であり、監督の作品歴を見渡した上でその特質を考える場合、当初から見え隠れしていた「感謝」が正面から語られていることで、ひとつの重要な到達点だと位置づけることができるように思う。

日常生活の中では、映画の中の女性のように、我々が自分の人生を俯瞰して、人々とのつながりによって生きることができてきていることに感謝を捧げる気持ちになるということとはなかなかないものである。皮肉にも人間の心理メカニズムがその気持ちを保持し続けることを許さない。例えば、交番に表示された交通事故死傷者の数字を見て泣き崩れていては日常生活が成り立たない。正常な精神状態を保つための防衛規制が働くのである。だが、このように普通は人生の中で意識することの少ない、そして最後にこそ味わうであろう崇高な感謝の気持ちを監督はあえて切り取って見せ、これを時に思い出して「日常生活」においてもきちんと感謝の心を人に伝えようというメッセージを込められたのだと解釈したい。

このように、佐々部監督は極めてまっすぐに堂々と映画作りをされる。しかし、日常生活に浸っている私たちに「崇高」や「感動」をまともに持ってこられては、観ている方として正面から顔をのぞき込まれるような気恥ずかしさやとまどいを覚えるのも確かであるし、単純で直線的とも言えるこのメッセージ性に、本数を多くこなしている映画鑑賞者からは、映画としての機知に欠けるといふ声さえ聞こえるものと予測できる。しかし日本映画の伝統を振り返るに、佐々部監督は、日本映画の本流のひとつをこの現代に受け継ごうと意識して活動している数少ないアーティストのひとりなのではないかという気もする。この気恥ずかしい崇高とでも言うべき情緒は、日本映画の伝統的な特質のひとつであって、1970年代の邦画の冬の時代には「暗い」と称されたものであり、別の時代では、例えば木下恵介が『二十四の瞳』(1954)・『喜びも悲しみも幾歳月』(1957)・『野菊の如き君なりき』(1955)などに結晶させたものではなかったか。類似の作品を挙げれば、古くは『名もなく貧しく美しく』(1961、松山善三監督)・『浮雲』(1955、成瀬己喜男監督)・『山椒大夫』(1954、溝口健二監督)・『生きる』(1952、黒澤明監督)・『家族』(1970、山田洋次監督)・『裸の島』(1960、新藤兼人監督)・『人間の条件』(1959-1961、小林正樹監督)・『ここに泉あり』(1955、今井正監督)など、また比較的新しいものでも『阿弥陀堂だより』(2002、小泉堯史監督)・『学校』(1993、山田洋次監督)・『サンダカン八番娼館 望郷』(1974、熊井啓監督)・『月光の夏』(1993、神山征二郎監督)・『泥の河』(1981、小栗康平監督)・『ホテル』(2001、降旗康男監督)など、枚挙に暇がない。佐々部監督は山田洋次監督を尊敬し、『幸福の黄色いハンカチ』(1977)に決定的な影響を受けたと発言されている(6月14日授業)が、これらの作品はいずれも現代の私たちの多くにとって「耐え」られそうもない透徹した崇高さを持ち合わせている。師事した方々も降旗康男氏や杉田成道氏など、こうした点を共有する方々が多い。こうした特質のため、佐々部作品は、思い切り毛色を変えたり、はずに構えたり、実験を試みたりする作風とは全く無縁で、ひねりのない作品に見えるのだと考えられる。しかしもちろんそのこと自体が作品としての価値を低めるわけでないことは強調しておこう。

監督の制作姿勢そのものがこの透徹した崇高の実践だという側面もある。『四日間の奇蹟』はベストセラーを原作に持ち、『世界の中心で、愛をさけぶ』（2004）や『いま、会いにゆきます』（2004）のように大々的な宣伝攻勢をかければヒットする作品であったはずだが、そうした鳴り物入りの商売気は監督の作品作りにとって障害になると言わんばかりの興行体制だった。実際問題として興行収入も、『世界の中心で、愛をさけぶ』が85億円、『いま、会いにゆきます』が48億円で、2004年の邦画の2位と3位を占めるのに対し、『四日間の奇蹟』は発表対象（10億円以上）である26作品の中にすら入っていない（社団法人日本映画制作者連盟（<http://www.eiren.org>）の発表資料）し、『キネマ旬報』の専門家によるベストテンでも順位的にはほぼ無視されているに等しい。

4 『半落ち』の場合

『四日間の奇蹟』に至るまでの作品を、前節で見たような到達点までの道のりにある通過点として捉えることも可能である。世間で評価が高かった『半落ち』も例外ではない。『四日間の奇蹟』は、人生の素晴らしさ、受け継がれていく命の素晴らしさを考えさせ、それらへの感謝を語る作品となっているのだが、佐々部監督のそれまでの作品には、どれもこの「感謝」というキーワードが見え隠れし、そこに向かっていくように思われる。

『四日間の奇蹟』の前年に公開された『半落ち』（横山秀夫原作）は、命について考えさせる作品であった。アルツハイマー病の妻を不憫に思った主人公が本人の求めに応じて絞殺してしまう。子供も骨髄性白血病で亡くなっており、生きる目的を失うのだが、主人公は骨髄提供によってある少年を救ったことがあり（骨髄移植の制度では互いに誰であるかはわからないようになっている）、その少年が書いたのではないかと思われる新聞の感謝の投書に妻が限りなく喜びを見いだしていたことを妻の日記で知って、骨髄提供者上限の年齢に達し、死んだ我が子と同じ病気の人を救える可能性がなくなるときまで、妻の後を追わずに生き恥をさらそうと決心する。自分が自分であることがわからなくなっていく病気を持った者、主人公の骨髄提供で救われた人などを通じて、命について考えさせられるのだが、映画では最後に、救われた少年が主人公に遠くから「生きてください」と伝えるシーンがある。これは、どんな境遇にある人でも生きていくのが素晴らしいということ、また人から人へと命が受け継がれて行くことの素晴らしさ（この作品では骨髄移植によるもの）を訴える場面だと考えられる。この少年は主人公への「感謝」を表しているのだが、主人公も、骨髄移植への熱意によって、人が助け合って命を守っていく仕組みへの感謝を表しているとも考えられるのではないだろうか。この「仕組み」は我が子を救ってはくれなかったが、主人公にとって、病気の妻に喜びをもたらし、自らが生きる意味を明確に与えてくれたのである。

『四日間の奇蹟』には「感謝」という言葉自体がかなり出てきたが、『半落ち』ではそうではない。「感謝」につながる命の問題を扱いながら、直接感謝そのものを描いているわけではない。「感謝」の観点から作品群を眺めた場合、『半落ち』から『四日間の奇蹟』へ進展したという方向性を感知することができるように思われる。

因みにこの『半落ち』もベストセラー狙いのミステリーものという捉え方をしては監督の意に沿わない。それはこの作品の形式であって本質ではないのに、プロの映画評論家にも「キーポイントとなる犯人梶の終始一貫とした重苦しさは、ストーリー展開のリズムを削いでいる。犯罪の動機からすれば、それもやむを得ないのかもしれないが、ミステリーの芯になる部分なので、もっと謎っぽく不可思議な雰囲気があってもよかったのでは。」（西脇秀夫（2004, p98））というような、佐々部作品の流れやテーマの重さを理解せず、ミステリー物としか捉えようとしていない論評もある。

5 『陽はまた昇る』の場合

『四日間の奇蹟』が非現実の設定を持ち、『半落ち』がミステリアスな殺人事件と拘置所や法廷の中という設定を持ち、「崇高」な世界を描くにふさわしかったのに対し、デビュー作の『陽はまた昇る』の場合は、命や人生といったレベルの話ではなく、日常世界を題材としている。電機メーカーでお荷物扱いされている工場が、家庭用ビデオ規格のVHSを成功させる奮闘記であるが、この中でも、日常的に具体的な感謝が描かれている。VHSを成功させて退職することになった工場長が最後のシーンで発した「夢中にさせてくれてありがとう」という言葉がある。このシーンは部下たちがVHSの人文字を作って工場長に感謝を表す場面でもあるのだが、このカタルシスの場面は、言うまでもなく、『幸福の黄色いハンカチ』のラストで大量のハンカチがはためくシーンを意識したものであろう（この作品でも、「今でも待っていてくれてありがとう」「帰ってきてくれてありがとう」という感謝がラストシーンに込められている）。また、工場長の家族も丹念に描かれ、家族同士の協力とそれへの感謝が見て取れる（佐々部監督が「家族」を重視していることは、大切なものと聞かれて「一番は家族、二番が映画」と答えていることでもわかる（おかむら良（2005, p53））。彼の作品群を「家族」をテーマに分析することも可能であろう）。

この作品には、日常的なものだけでなく、より高次なものを感じさせる場面もあることはある。VHS成功の鍵を握ると思われる松下幸之助氏へのアタックのために東名高速を夜通し走るシーンで語られた話が興味深い。山登りをしていると、高山に凜として咲く小さな花にも意味があると感じられ、どんな小さなものもすべてこの目で見てみたいというのである。素晴らしい世界を創った創造主への感謝というものが一瞬顔を覗かせるシーンである。

この作品の監督の地位は、偶然に回ってきたものなのだが、監督の作風に見事に適合した企画だったと言えよう。映画としての誠実さを優先させ、企業間の競争を社名が実名のまま描いたので、予算的にも厳しかったし、障害も多かった。そこにはデビュー作で世間的なヒットを飛ばそうなどという姿勢は微塵もない。

『陽はまた昇る』は、偶然に担当することになった作品ではあるが、その後の監督の姿勢を予測するような誠実な出来映えである。そして、「感謝」というキーワードも見いだすことができ、『四日間の奇蹟』へ向かって流れ出す方向性が見てとれる。

6 『チルソクの夏』の場合

デビュー作の『陽はまた昇る』に続いて公開された『チルソクの夏』は、監督の故郷である下関を舞台に、監督が長い間暖めていた作品である。在日の方に対する差別感情の問題を織り込みながら、下関と釜山の間で行われた友好陸上競技会をきっかけに、日本人の女子高校生と韓国人の男子高校生の、遠くから相手を思う恋心を描いた青春物である。故郷を舞台にした青春物と言えば、大林宣彦監督の『転校生』（1982）、『時をかける少女』（1983）、『さびしんぼう』（1985）、『ふたり』（1991）、『あした』（1995）といった尾道作品を思い出すが（尾道作品については、参考文献の拙著を参照）、『チルソクの夏』も情感にあふれ、かけがえのない青春の輝きを切り取った珠玉の作品である。

この作品では「感謝」や「ありがとう」の言葉が重要な場面に登場して観客に印象づけられるということはない。しかし描かれているのは、まさに感謝につながる人格形成の物語である。人間の人格は、上昇と退行を繰り返しながら、全体として発達していくものであるが、青春の時期は人格形成にとって極めて重要な期間であり、その期間の中で、時に退行して幼稚な行動に走ったり、時

に大人の振舞いを見せたりしながら、大人への階段を上がっていく。そのプロセスの中では、その幼稚な行動も大人の振舞いも、必要欠くべからざるものとして、感謝を持って振り返るべきものである。青春の時期を青春たらしめてくれたものを硬軟とりまぜて思い出し、大人は甘美なノスタルジーを味わうのだが、その時期があったからこそ今の自分があるというように、感謝の念も抱くものだ。この作品は中年となった二人の再会で終わり、その時代から昔を振り返る形で描かれているが、この中年の二人もかつての切ない恋愛に対して感謝を持ってその後の人生を歩んできたはずである。

また監督は、いわゆるアイドルの抜擢を避け、映画で描かれる陸上競技に向けた俳優を探し当て、嘘にならない画面作りに努力した。この映画制作への真摯な姿勢は、監督自体が映画制作に関わることへの感謝の表れであると筆者は考えている。

7 監督デビューの前

佐々部監督が『陽はまた昇る』でデビューする前には、食べていくための仕事も必要であり、必ずしも好んだ仕事だけをして来られたわけではない。だが、関わってきた仕事の中には、デビュー以降の路線につながる作品がかなりある。例えばフジテレビのドラマシリーズ『北の国から』が挙げられる。これは連続テレビドラマとして放映された後、爆発的な人気を博し、以来時折単発テレビドラマとしてその続編が放映されたものだが、佐々部清氏は、『北の国から'95秘密』(1994)と『北の国から'98時代』(1998)に演出補として関わった。このシリーズは、離婚した男が東京から故郷の富良野へ戻り、二人の子供達とともに、なりふり構わず、自給自足の厳しい田舎の貧乏な生活を始め、様々な深刻な問題で子供達と衝突を繰り返しながら、家族の絆を強めていく物語である。おしゃれな都会生活に慣れた目から見れば粗野で無骨この上ないのだが、格好にこだわらずに正面から相手の心にぶつかっていく態度は、忘れていた誠実で素直な日本の伝統を視聴者の中に呼び覚まし、列島を深い感動で包んだのであり、それこそがまさに本論で述べている日本映画の重要な伝統なのである。原作の倉本聰氏の活動姿勢自体もまさにそれを体現したものであり、富良野に住み、じっくりと作品を育て上げた。佐々部氏がこれに影響を受けなかったはずはないし、喜びをもってこのシリーズの制作に関わったのに違いない。

また『ユキエ』(1998)も言及したい作品の一つである。家族の反対を振り切って米国に嫁いだ日本人女性が、中年を過ぎてアルツハイマー病にかかり、精神的に少しずつ自分が自分になっていく悲しさを、夫に対して長いさよならとありがとうを告げていくというコンテキストの中で描いた作品である。後に『半落ち』で再び同じ病気を扱うこととなったのは偶然かもしれないが、こうした内容の作品に取り組んだことには、やはり注目しないわけにはいかない。

8 『四日間の奇蹟』の後

『四日間の奇蹟』の後に公開された『カーテンコール』は、監督の故郷である下関を舞台に、映画産業華やかになりし時代に映画館に勤めていた人気者の在日の男性を韓国に探しに行き、下関に残っていた娘との再会が実現するというあらすじの中に、映画に対する思いを込めた作品である。舞台は映画館であり、映画館の舞台裏やそこに勤める人々を描き、映画が映画を描くという典型的な入れ子構造を見せている。この作品は映画へのオマージュと言ってよいと思われるが、監督自身が青春の時期にのめり込み、その後幸せを与え続けてくれた映画というものに対する感謝を表したものという捉え方もできる。『四日間の奇蹟』で人生や命そのものに対する感謝という究極の念を描くに至った後に、それを伝える媒体である映画そのものに対する感謝へと向かうという転換は、思考

の流れとして自然である。

監督としては秀作『ニュー・シネマ・パラダイス』(1989)をだいぶ意識しているようにも思われるが、残念ながら筆者にとっては、成功を収めたあと、故郷を舞台に、映画に対する感謝を込め、観客を感動させようと気持ちがやや上滑りしているようにも感じられる出来であった。これは佐々部監督に限ったことではなく、類例は多い。例えば大林宣彦監督の尾道三部作のうち、第三作の『さびしんぼう』は、第一作の『転校生』と第二作の『時をかける少女』と比べて、ギャグを多用するなど個性的な作風が濃く出過ぎて、つなぎとめられる観客の数を減らしているように思われるし(但し筆者自身はこの作品を愛しているし、黒澤明監督の注目を受けたのは有名な話である)、新尾道三部作では第一作の『ふたり』が巧みに原作赤川次郎の軽い文体を表現した佳作であるのに対して、第二作の『あした』は演出過剰、第三作の『あの、夏の日 とんでろじいちゃん』(1999)は自分の世界に浸り過ぎという体で、やはり共鳴する観客の数は減少したであろうと思われる。巨匠黒澤明にしても、晩年の原爆映画『八月の狂詩曲』(1991)は、新しい作風を試みたのは確かだと思うが、往年の『生きものの記録』(1955)のような凄みがなく、出汁の効かない料理という感が拭えなかった。佐々部監督のクローズアップや独り言のセリフなどの余剰を排除する作風(6月14日授業で監督自身が語ったとおり)からすると、過剰な思い入れが出てしまう出来というのは皮肉なことである。

2006年9月公開の『出口のない海』は、『半落ち』に続いて横山秀夫氏の原作によるものであり、佐々部監督が敬愛する山田洋次監督のいわば指名によって登板した作品である(脚本も山田洋次氏が参加している)。悪化した戦局の打開のために考案された特攻用の人間魚雷「回天」の乗組員の物語で、野球の夢を奪われた学生兵士を主人公としているが、後生にこの悲劇を伝えるためという形で犠牲になる姿を描いた反戦作である。戦後60年を過ぎても『男たちの大和 YAMATO』(2005)、『紙屋悦子の青春』(2006)などと次々制作され注目される反戦作のひとつだ。『出口のない海』を「感謝」という視点で考えてみると、監督がこれまで人生や命に対する感謝、それを伝える映画への感謝を表した後に、今度は映画が制作することのできる平和というものに対する感謝の念を表した作品でもあるという見方ができるのではないだろうか。因みにこの作品は、九州大学の箱崎地区の正門や古いトイレなどがロケに使われている。

その次の作品には『夕風の街 桜の国』が予定されている(2007年夏公開予定)。これは原爆を扱う作品だそうだが、平和への感謝のために反戦作を誠実に希求すれば、日本映画である限り、原爆へと向かうのは自然であろう。黒澤明も最初は『わが青春に悔いなし』(1946)、『静かなる決闘』(1949)などの反戦作を撮ったが、原爆を扱う『生きものの記録』(1955)や『八月の狂詩曲』(1991)はその後の制作となった(但し、原爆を描いた日本人の監督が常に原爆以外の反戦作から始めたと言えない)。一般化することはできない。

9 まとめ

本稿は、佐々部清氏が監督デビューしてからこれまでの作品群の流れを、「感謝」をキーワードにして捉える試みである。その中で『四日間の奇蹟』が収斂した通過点として位置づけられることを主張した。作品論として有意義なものであることを祈ると同時に、授業のレポートとしてよい例を示すことができれば幸いである。

筆者自身も本稿で取り上げた作品たちに出会えたことに対する「感謝」の念から本稿を執筆するに至ったとも言えるが、佐々部監督の映画にかけける思いの源も若い頃に出会った多くの映画がもたらしてくれた幸福への「感謝」であるのではないだろうかと推測する。

参考

- 荒木正見・鈴木右文（1995）『尾道を映画で歩く』中川書店。
荒木正見・鈴木右文（2003）『尾道学と映画フィールドワーク』中川書店。
おかむら良（2005）「「カーテンコール」佐々部清監督インタビュー」『キネマ旬報』No.1442.
sasabe.net <http://www.sasabe.net>
西脇英夫（2004）「劇場公開映画批評：半落ち」『キネマ旬報』No. 1398.
日本映画データベース <http://www.jmdb.ne.jp>
映画データベース allcinema ONLINE <http://www.allcinema.net>
社団法人日本映画制作者連盟ホームページ <http://www.eiren.org>

“Gratitude” in the Films by SASABE Kiyoshi

Yubun SUZUKI

The aim of this paper is twofold. It is an attempt to capture the films directed by SASABE Kiyoshi as an artistic expression of sincere and profound “gratitude”. The paper also provides a standard sample of a term paper for “The World of Movies”, an elective class organized by the author under the category of general education at Kyushu University.

This thesis analyzes all his movies, *Hi wa mata Noboru* (*Dawn of a New Day – The J.V.C. Story*), *Chirusoku no Natsu* (*Summer of Chirusoku*), *Hanochi* (*Half a Confession*), *Yokkakan no Kiseki* (*Miracle in Four Days*), *Kaaten Kooru* (*Curtain Call*) and *Deguchi no nai Umi* (*Sea without Exit*) and claims that *Yokkakan no Kiseki*, in spite of its unpopularity, forms an important turning point in his filmography. His three films earlier than the dividing line modestly depict their characters’ thankfulness to people around them, what they live for, life itself, and the like, apart from their motifs. *Yokkakan no Kiseki*, however, holds gratefulness as its main theme and strongly suggests the significance of stating thanks clearly to other people. The author considers it natural that SASABE Kiyoshi, after completing a film with a clear message which was implicit in his earlier works, go on to pay homage to movies themselves for acting as his precious mode of expression (*Kaaten Kooru*), emphasize the importance of peace thanks to which films could be produced (*Deguchi no nai Umi*), and depict atomic bombs, the most devastating threat to peace (*Yuunagi no Machi*, *Sakura no Kuni*, to be released in the summer of 2007).